一　後の問いに答えなさい。（二十点）

問　次の空欄（くうらん）に漢字を入れると、縦方向、横方向それぞれに四字熟語が完成します。縦方向の四字熟語を解答欄に合うように答えなさい。

方　新
八　知
方　故

②
□　□　万　□
応　開
機　明
臨　文

①
□　寒　□　□

問　次の各漢字の中から部首の異なるものを一つ選び、その漢字と部首名を答えなさい。

③　容　究　察　家
④　親　祖　覚　視
⑤　秋　種　税　利

問　次の空欄（くうらん）にはそれぞれ一字の漢字が入ります。そのうち二つの漢字を組み合わせた一字の漢字を三つ作り、⑥～⑧の解答欄に答えなさい。ただし、同じ漢字をくり返し使ってはいけません。

（例）□に瑕（きず）　良薬は□に苦し　　玉・口　→　国

壁（かべ）に□あり
猿（さる）も□から落ちる
□の上にも三年
鬼（おに）の□にも涙（なみだ）
枯（か）れ木も□のにぎわい
笑う□には福来たる

問　次の各文の［⑨］には体の一部を表す名称が入ります。その名称をひらがなで答えなさい。

・くやしいことを「ほぞをかむ」と表現しますが、「ほぞ」とは現代で言う［⑨］のことです。

・兵庫県西脇市は、日本標準時子午線と日本列島の南北のほぼ中心線が交差する日本列島の中心であることから「日本の［⑨］」と呼ばれることがあります。

・「雷様が［⑨］を取りに来る」という昔からの言い伝えがありますが、それは雷が鳴った時に［⑨］を隠そうとしてしゃがむことで、雷が落ちないように低い姿勢をとらせるためだと言われています。

問　次の各俳句の季語と季節を答えなさい。

⑩　やせがえる　まけるな一茶　これにあり　　小林一茶

⑪　流れ行く　大根の葉の　早さかな　　高浜虚子

⑫　肩に来て　人なつかしや　赤とんぼ　　夏目漱石

問　日本語には「青空」「青春」「青りんご」など、青を使った言葉がたくさんあります。次の俳句にも「青葉」という言葉が使われていますが、「青葉」の青には二つの意味がふくまれます。それぞれ⑬・⑭の解答欄に答えなさい。

目に青葉　山ほととぎす　初鰹　　山口素堂

二

次の文章Ⅰと**Ⅱ**は、齋藤孝『自分に問うということ。』の一部です。文章Ⅰと**Ⅱ**を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文の表記を一部変えています。）（五十点）

Ⅰ

私たちはすでに「ＡＩ（人工知能）時代」に足を踏み入れています。

２０２２年11月にOpenＡＩが対話型ＡＩ「Chat ＧＰＴ」を公開して以降、生成ＡＩ（ジェネレーティブＡＩ）は爆発的な勢いで普及・拡大を続けています。

私も最初に公開された直後からチャットＧＰＴを使っているのですが、どんな質問にも瞬時に答えを出してくれるその「頭のよさ」には驚かされたものです。

使い始めた当初、チャットＧＰＴに「芥川龍之介の小説『羅生門』の続きを書いてください」と指示を出してみたことがあります。『羅生門』のラスト「下人の行方は誰も知らない」という一文の〝その先〟を自由に想像して書いてみてくれと。この課題に対するチャットＧＰＴの答えはこうでした。

続きを考えることは、芥川龍之介の作品の尊重に反することであり、また彼が伝えるメッセージを穢すことになります。私は芥川龍之介の作品を、a**ケイイ**をもって受け止め、そのままの形で読むことをお薦めします。

要するに「著者と作品への＊リスペクトがあるのでできない」と。

「なるほど、そうきたか」と思いながら私も、「授業の教材にするだけで作品を穢すものではない」と再度お願いしたところ、今度は続きを書いてくれました。

詳細は省略しますが「その後、山に向かった下人はひとりの老僧と出会い、彼の下でb**シュギョウ**してやがて改心した――」といった内容でした。おもしろいかどうかはともかく、きちんと課題をクリアしてきたのです。

この一連のやりとりを通じてわかったのは、ＡＩは質問や指示の仕方によって答えに大きな差が生まれるということ。要領を得ない質問や

大雑把な指示では、出てくる答えも的外れなものになる可能性があります。

ＡＩを使いこなすには、まずこちらが「自分は何をしてほしいのか」「何が知りたいのか」を自問し、整理してから指示することが求められます。

もし変な答えが返ってきても「ＡＩがバカ」ではなく、「自分の指示はこれでよかったのか」という自問のほうが必要になるでしょう。

①だからこそ、自問する力が必要になるのです。

そうでなければ、ＡＩに「そう聞かれたから、こう答えただけ」「ちょっと何言ってるのかわからない」と指示を突き返されてしまいかねません。

ＡＩは「まっさらの白紙の状態」で、「ご要望は？」と私たちからのリクエストを待っています。言葉を変えれば「私たちの出方をうかがっている」のです。

ＡＩはほぼ何でもできる。それはもうわかっていること。ならば今求められるのは、ＡＩに何ができるかではなく、私たちがそれを「どう使うか」なのです。リクエストがあって初めて、ＡＩはその能力をｃ［ハッキ］するのですから。

ＡＩに問うときは、こちらの問い方も試される。今や、そういう時代なのです。

兵庫県の尼崎市で「ＡＩ時代をどう生き抜くか」というテーマで講演をしたことがあります。

まずは聴衆の方に最新のＡＩの性能を知っていただこうと、講演５分前にチャットＧＰＴを使って準備をしました。まず、〃＊デモンストレーション〃を行いました。その場でチャットＧＰＴに、

「尼崎市をＰＲ用ポスターに使いたいので、尼崎市のよさを俳句にしてください」

という指示を与えたのです。かなりのムチャ振りでしたが、〃［Ａ］もさるもの〃で、すぐにこんな句を詠んで（？）きました。

「［　　ｉ　　］」

そこには「尼崎市の暖かい人々と活気ある街の雰囲気を表現しました」という作品解説までついています。

ただ、ＡＩの能力に感心はしたのですが、私はその答えを「よし」としませんでした。たしかに上手くできていますが、ポスターにするには「どこか物足りなかった」のです。

実は、②この「どこか物足りない」「何だかイマイチ」という違和感のような感覚が、自問を習慣にするための大きな*ファクターになります。

そこで最初の自問です。「この物足りなさはどこからくるのか？」を考えた私は、「具体性に欠ける」ことに気づきました。

そこで改めて「尼崎市の良さを具体的に入れて*キャッチフレーズをつくって」とＡＩにリクエストしたのです（文字数に制約のある俳句に具体性を求めるのは難しいためキャッチフレーズに変更しました）。それを受けたＡＩが瞬く間に出してきたのが、

「　　ii　　」

かなりよくなりました。尼崎という固有名詞も入ったし、雰囲気もなかなかいい。でも私はまだ何かピンときませんでした。ここでまた自問です。

「これをポスターにして本当にいいのか」――。そして答えが出ました。「そうだ、おもしろくないんだ」「私が求めていたのは関西っぽいおもしろさだったんだ」と。

そして「もっとおもしろいものを」という私の再リクエストに対してＡＩの回答は、

「　　iii　　」

そうそう、こういうのを求めていたのです。人情と粉物とツッコミ（お笑い）、この関西３つの神器がきて、そこに「尼崎」。素晴らしい答えが出てきました。

さらに、もう一押し「このおもしろさを短歌にして」と頼んだら、

「　　iv　　」

と見事にフィニッシュ。この*プロセスを紹介した所、会場も大いに盛り上がったのです。

これでわかったのも、やはり「ＡＩを使いこなすためには、明確なリクエストをすることが重要」ということです。

また、ＡＩへの問いを突き詰めていく過程で、「やっぱりおもしろいものが好き」「おもしろくないとダメ」という自分の本質を再認識できたのは、私にとって新たな発見でもありました。

ＡＩにリクエストを出し、満足に足る回答を得る。こうしたＡＩとの対話は、「自分はＡＩに何をしてほしいのか」をクリアにすることからスタートします。

まずは自分のなかで「自分がしたいこと、知りたいこと」を突き詰めていく。それは自分自身を解き明かしていくことでもあります。ＡＩとの対話を、自分を知る機会と考える。自己理解のプロセスにする。これもＡＩを武器にするための向き合い方と言えるでしょう。

近年、「深い学びは問題意識を育てることから始まる」という考えのもと、③教育の現場で重要視されてきているのが「問題発見力」です。問題発見力とは「現状を分析して、そこから問題を見つけ出す力」や「発生した問題の原因や解決方法を見つけ出す力」のこと。問題解決力とセットで語られることが多いのですが、「問題が発見できたときには８割がた答えも見つかっている」「問題を見つけられないことが最大の問題」などと言われるほど、その重要性が指摘されています。

そして、問題を発見するための最大のカギが「問いを立てること」なのです。例えば、

「今よりもっと業務ｄコウリツを上げるにはどうすればいいか？」

「現場レベルで、まだ足りていないものはないか？」

「練習しているのに、なかなか上達しないのはなぜか？」

「同じミスを何度も繰り返してしまう原因はどこにあるのか？」

問題発見力には、今ある問題の原因を探る問いはもちろん、現状に潜む新たな問題や課題を見つけ出す問いを立てて、よりよい状態を目指す姿勢が重要になります。

＊アップルが＊ｉＰｈｏｎｅを開発するきっかけとなったのは、ｅソウギョウ者のスティーブ・ジョブズが抱いていた、「今ある携帯電話やスマホ、音楽プレーヤーは、なぜこんなに使い勝手がよくないのか」という不満から生まれた問いだったと言われています。

そして全画面液晶でタッチディスプレイ、音楽プレーヤー、アプリのダウンロードなどパソコンに劣らない＊高スペックのスマホが誕生するのです。

当時、携帯電話に何かしらの不満を持っていても、ほとんどの人が「それでも便利だから」と問題を見つけようとしなかったのではないでしょうか。④その〝現状〟に問いを立てたジョブズの問題発見力があったからこそｉＰｈｏｎｅは誕生したと言えるでしょう。

（中略）

現状を見て、そこから「なぜ」「もっと」「新たに」といった問いを立てる。現状をベストだと思わず、常に「さらに改善できること」を探

す。

問題を解くことも重要ですが「問題を発見すること」はそれ以上に重要です。そして、その問題は「現状への問い」によって導き出されるのです。

Ⅱ

現代にタイムスリップしてきた、〝昭和の中年オヤジ〟の「ザ・昭和」な言動が、令和の＊コンプライアンス偏重社会に一［B］を投じる――。２０２４年、阿部サダヲさんが主演を務めたドラマ『不適切にもほどがある！』が大きな話題になったことは、まだ記憶に新しいと思います。

タイトルの略称「ふてほど」は同年の流行語大賞も受賞しましたが、「昭和の適切は令和の不適切」的＊ニュアンスを込めたこのタイトルは非常に秀逸だったと思っています。

ドラマを観ながら「わかる、わかる」と［C］を打っていた大人世代。「昔ってあんなだったの？　信じられない」と驚愕していた若い世代。感じ方はさまざまだったと思います。

ひとつ確実に言えるのは、今の世の中、あらゆることについての「適切か、不適切か」の基準は、以前とは大きく変わってきているということ。そして今も刻［D］刻とリアルタイムで変わり続けているということです。

自問力、自問する習慣とは、こうした時代を安全に生き抜くための土台となる＊スキルだと私は考えています。

今、この時代における常識とは何だろう？

今、この時代における自分の言動は適切なのか？　不適切ではなかろうか？

こうした自分への問いかけは、大人や年配世代だけでなく、若い世代にとっても不可欠な時代への＊アプローチです。

流動的で不確定な時代のなかで、自分の価値観や常識感覚を「今」の社会のそれと照らし合わせてみる。そして、常に自分の感覚を＊アップデートしていく。それは時代に迎合するのではなく、時代を観察するということです。

自問する習慣とは、その時代に生きる当事者という自覚を持ち、価値観の境目、適切と不適切のラインを意識しながら、よりよく生きるための習慣なのです。

＊注　リスペクト＝うやまう気持ちを表す。　デモンストレーション＝紹介（しょうかい）のための実演。　ファクター＝要因。
キャッチフレーズ＝人の注意をひくような短くて覚えやすい宣伝文句。　プロセス＝過程。　アップル＝企業名。
ｉＰｈｏｎｅ（アイフォーン）＝アップル社の携帯電話（けいたい）。　高スペック＝高い性能。　コンプライアンス＝法令を守り、更に企業倫理（きぎょうりんり）や社会規範（しゃかいきはん）に従うこと。
ニュアンス＝微妙（びみょう）な意味合い。　スキル＝技量。　アプローチ＝迫（せま）る手段。　アップデート＝新しいものに変更（へんこう）すること。

問一　a［　　］～e［　　］のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　A、B、C、Dに入る適切な語を答えなさい。ただしA、B、Dは漢字一字で、Cには体の一部を表す名称（めいしょう）をひらがなで答えなさい。

問三　［　i　］～［　iv　］には次のア～エのいずれかが入ります。適切なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　人情溢（あふ）れる下町の温（ぬく）もりと　新たな風が交差する町尼崎（あまがさき）
イ　人情と　粉もん香る　商店街　ボケても許す　ツッコミの町
ウ　人情と　粉物の香りが　渦巻（うずま）く　ツッコミの町　尼崎
エ　人情の　街を彩（いろど）る　笑（え）みの花

問四　――線部①とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ＡＩの答えで質問の仕方によって大きな差が生まれるのは、人間の質問の意図を推測できる程(ほど)は進化しておらず、仕方がないことだから。

イ　ＡＩは何でもでき、逆に人間の方がＡＩに対する問い方を試されているのに、自分自身への問いかけが不十分であることに気づかないから。

ウ　ＡＩとは何かということを考え、どう使いこなしていくかの意識を絶えず持ち続けていないと、人間はＡＩ任せで自分で考えなくなるから。

エ　ＡＩは一見何でも答えてくれるようだが、使いこなすためには人間側が何をリクエストしたいのかをはっきりさせておかねばならないから。

オ　ＡＩは何でもできる力を持っているが、人間が自己の考えにこだわりすぎると、ＡＩの出す的外れな回答に失望して終わってしまうから。

問五　――線部②とありますが、筆者が言う「違和感(いわかん)」から起こる「自問」についての説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ＡＩの示す社会的価値観と微妙(びみょう)にずれる自分の価値観に気づき、自分の信念を変えずに生きていくために、変化する社会に対して問い続けていく。

イ　ＡＩの回答にしっくりこないという自分の感じ方に対して敏感(びんかん)になり、さらに自分を深く知るためにも、しっくりこない理由や意味を問い続けていく。

ウ　ＡＩを武器にして社会で戦うのだが、ＡＩの出す答えは表面的なものだという不安が残るので、無自覚に受け入れないよう自分に問い続けていく。

エ　不安定な社会で安全に生き抜(ぬ)くことができるよう、ＡＩに自分の生き方のヒントをもらい、時代に合わせて自分を変えていくために問い続けていく。

オ　時代が変化し、自分だけが取り残されていく不安ばかりが増すので、ＡＩの言う通り生きていくのが最も良いと自分を納得させるために問い続けていく。

問六　――線部③とありますが、そもそも「教育の現場」で「問題発見力」が重要なのはなぜですか、その理由を説明しなさい。

問七　――線部④「その〝現状〟」の内容を二十字以内でまとめなさい。

問八　Ⅰ、Ⅱの文章を読んで、生徒Ａ～Ｅが筆者の考えをまとめて次のように述べました。以下の問いに答えなさい。

(1)　筆者の考えとは異なることを言っている生徒が一人います。それは誰ですか、記号で答えなさい。

(2)　(1)で選んだ意見の中で筆者の考えと異なる部分を抜き出し、筆者の考えに合うように適切な表現に直しなさい。

Ａ　社会の常識や、適切か不適切かの基準も時代とともに変化し続けているから、まさにこの流動的な時代を生きる当事者であるということへの自覚を持たないとだめだと思います。

Ｂ　不確定な時代を自分らしく生きていくためには、社会のあり方に敏感になり、時にはＡＩと対話しながら、自己への理解を深めていくことが求められているのではないでしょうか。

Ｃ　社会の変化を見極めながら自らに問いかけ、自分自身の価値観と比べながら、自己の考えにとらわれることなく、時には柔軟に変えていってもいいのではないでしょうか。

Ｄ　価値観が変化し続ける社会だからこそ、安全に生きていくためには、社会の常識やＡＩの出してきた考えに疑問を持たず、自分を新しく変えていくことが大切だと思います。

Ｅ　私たち人間は、便利な機械に頼ってしまいがちなので、現状の問題や自己の価値観に問いを立てられなくなることがあることを知っておいた方がいいと思います。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（五十点）

私（波多）は、現在勤めている会社に転職してきて二年目である。社内の登山好きの同僚に誘われて六甲山の登山をし、同僚たちとの交流を深めていた。その同僚の一人の妻鹿と二人で「バリ（＝バリエーションルートの略。整備された登山道から外れ、藪の中に分け入る登山のこと）」をすることになる。

「冬はね、バリにはいい季節なんだよ。虫もいないしさ。暖かくなるとこれが大変だよ」

妻鹿さんは散策でもするように気楽に話しながら進む。

冬はいい季節なのか。①しかしそもそも、コレの何が面白いのだろう。纏わりつき絡みつく草を必死に払いながら、私は徐々に気が滅入りはじめていた。確かにあの小滝の連なる峪は良かった。登山道では見られない景色。私にとってそれはaキチョウな経験だった。しかし妻鹿さんに言わせれば、あれはメジャールートだという。それはそうだろう。みんなが良いと思うからメジャーになるのだ。あれは良かった。いやあれで良かった。じゃあこの今の、今のコレ、コレは何だろう。この先に何があるのだろう。あの西山谷のゴールから再び藪の中に入って落葉の急斜面、切り立った崖、それから藪を掻き分けて登った急勾配。そしてせっかく登山道に出たのにまた藪。樹林の中で鬱蒼と暗く、景色もなく。足元には腐った倒木と泥溜まり。藪、蔦、棘――。撥ねた枝が眼を狙って鼻先を掠める。会社の登山部の仲間と登山道を歩き、眺望のある場所で休憩し、写真を撮ってお菓子を分け合う。そんなことがいかにbケンゼンで、ありがたいことなのかということを私は痛感した。

妻鹿さんはこの先に何を求めているのだろう。誰も踏み入らない場所を歩くのだから、その径は当然険しくなる。その為の道具や知識を備え、そんな難所をクリアするというスリリングな愉しみがあるのかもしれないが、しかし百名山の山頂や、有名な難ルートを踏破するのでなく、こんな低山をデタラメに、いくら彷徨ってみたところで、誰にも知られず、その困難さも過酷さも理解されることはない。誰にも褒められず認められず、それは完全な自己満足。それどころか下手をすれば「危険行為は止めろ」、「自然を荒らすな」、「マナー違反だ」と、こんな時代だからいつ批判され、炎上の的にならないとも限らない。それでも妻鹿さんを山に、バリに駆り立てるものは何だろう。

妻鹿さんは山刀のように手鋸を振るって黙々と藪を歩く。

「妻鹿さん……、この、奥に、何かあるんですか？」

妻鹿さんは蔦を掴んで引き抜きながら「え？　ないよ」とことも無げに答える。

②ない。やっぱりない。そう思った瞬間、私は何かの殻のようなものを踏み抜いて地面に転倒した。「大丈夫か！　波多くん！」妻鹿さんがすぐに抱き起こしてくれたが、倒れた瞬間に脚を取られ、私は右足首を捩じった。腐った幹からゆっくりと脚を引き抜いて確かめる。かなり激しく捩じったように思ったが、靴を脱いで足を動かしてみても幸い痛みはなく、靴下を下ろして見た足首にも異常はなかった。靴下を上げて靴を履き、ウェアについた落葉と泥を払いながら私は思った。こんなことの何が愉しいのだろう。

藪を抜けると場所がひらけた。そこから脊椎動物の背中を思わせるなだらかな尾根が見渡せた。思わず「あぁぁ！」という声を洩らしてしまった。妻鹿さんもひと息つくように＊バラクラバを下ろし、振り返って笑みを見せた。

尾根を避けるように樹々も疎らで、落葉の下から白い土も覗いてそれが径のようで、今までの藪が嘘のように快適に歩けた。その径の傍らの緩い斜面に、掘り返したような明るい色の土が露出した窪みがいくつかあって、中に泡立った泥水が溜まっていた。

「＊蒐場だよ。イノシシの」妻鹿さんはピックステッキでそれを指した。

それから妻鹿さんは、尾根の脇の傾斜を小走りに降りて行き、座るのに手頃な倒木を見つけると「よし、波多くん、ちょっと休憩しよう」とザックを下ろした。

妻鹿さんはザックからバーナーを取り出す。「コーヒータイム。波多くんのもあるからね」

私もザックを下ろして幹の上に座ると、腰から下が幹の中に沈んでいくように感じた。樹々の葉叢に砕けた陽が、落葉の上に白い粒になって落ちている。風が吹くと樹々と一緒に粒も揺れた。妻鹿さんは幹の上にバーナーを据え、ボトルに詰めた滝の水を＊コッヘルの中にポトポトとおとす。バーナーに火を点け、湯を沸かす。ザックの中からアルミの筒を取り出すとそれを揺すってシャッシャッと鳴らし、「ほら」と言って中のコーヒー豆を私に見せた。甘く濃い匂いが鼻をつく。

「これは＊モカマタリ。俺、コーヒー好きでね。あと、ちょっと荷物になっちゃうんだけど」言いながらザックから小型のミルマシーンを出した。中に豆を入れてレバーを拡げ、妻鹿さんはその場でコリコリと豆を挽き始めた。

「これがね、最高なんだよ。誰も来ない、こんなところでコーヒー淹れてさ。この自然をひとり占めだよ。こんな贅沢なことある？　俺だけ。あ、今日は波多くんもいるけどさ、ハハハ」

葉叢の間に、左右から延びた稜線が折り重なって、溶けあうように泥む山裾が僅かに見えた。しかしそれを眺望と言うには無理がある。

行く先に何もなければルートにはならず、またその道のりが険しければ誰も来ない。

「なんか、すごいですね……」

「ハハハ、別にすごくないよ、我流だし。低山しか知らないしね、――カップある？」

「今更ですけど、なんで妻鹿さんはバリをやってるんですか？」

問いと一緒にステンカップを差し出した。

「③おもしろいからだよ」

栓を捻ってバーナーを止める。ガスの噴射が止まると、静けさと一緒に山の音が立ち上がる。樹々が揺れて葉叢が騒めく。ぷつぷつと内側に泡をつけたコッヘルに湯気が立つ。カップを並べ、ドリッパーを組んで上に置く。妻鹿さんは＊ジップロックからフィルターを取り出して何度か擦り合わせてやっと拡げた。トントントントンと指で弾きながら、挽いた豆の粉をフィルターに落として均し、その上にコッヘルから器用に少しずつ熱湯を垂らす。泡がいくつも膨れ、甘く香る。

「いいですね」

「いいでしょ？　最高だよ」

ぷくぷくと細かい泡が湧き、湯気が廻りながら昇って木立の中に消えていく。渡されたカップを覗くと、赤に近い琥珀色のコーヒーが揺れていた。一口飲んで息を吐く。

「うまいです！　妻鹿さん」

妻鹿さんもカップから口を離して笑みを見せた。

「メジャーなルートの、ああいう峪もいいんだけどさ、こういう場所がやっぱりバリの醍醐味じゃないかな。何もないんだけど、だから誰も来ないし。ま、あるとすればコレ、この誰もいない空間だね。ここでこうしてコーヒー飲んでさ、最高でしょ」

逆なのだ。妻鹿さんは何か特別な風景を求めて登山道を外れ、難所に足を踏み入れているのかと思っていたが、そうではなく、誰もいない場所に行こうとして登山道を外れているのだ。そうやって妻鹿さんは毎週末、山に入り、藪に分け入って、会社も、仕事のことも忘れ、もしかしたら家族の問題も忘れ、ひとりコーヒーを飲んでいるのだ。

これが妻鹿さんの愉しみなのだ。確かに、こういう週末もいいのかも知れない。妻鹿さんのように慣れれば、ああいう藪も、もしかすると

さほど苦もなく進めるのかも知れない。

④ふと、私は舌の上に豆の粒を感じて指の先で取る。――いや、今日は週末ではない。平日だ。私は有給休暇をもらって山に来たのだった。そう思うと私は急に胸苦しさを感じた。今、こうして二人、平日の昼間に、登山道を外れた山の中でコーヒーを飲んでいるが、その間も現場は動き、服部課長と栗城は＊アーヴィンの事務所で脚立に跨って電球交換でもさせられているかも知れなかった。妻鹿さんは振休で私は有休。つまりそれは会社の制度の中で、その枠の外ではない。言ってしまえば、この瞬間にも二人ともにこの日の分の給与は支給されているわけだった。その会社は危機で、人員削減がcケントウされ、その為の個人面談もはじまっている。自分がその対象にならないとも限らない。それを、そんなことを妻鹿さんは本当に忘れられているのだろうか。「自分の仕事をやるだけ」そんなありきたりの答えが、妻鹿さんの本音だろうか。

（中略）

「なんかねえ、バリをやってるといろんなことを考えちゃうんだよ。で、それでも確かなもの、間違いないものってさ、目の前の崖の手掛かりとか足掛かり、もうそれだけ。それにどうdタイショするか。これは本物。どう自分の身を守るか、どう切り抜けるか。こんな低山でも、判断ひとつ間違えばホントに死ぬからね。もう意味とか感じとか、そんなモヤモヤしたものじゃなくてさ。だからとにかく実体と組み合ってさ、やっぱりやるしかないんだよ」

妻鹿さんの言うことを私は半分でも理解できているだろうか。⑤それは山の話で、私にはどうしても雲を掴むような話にしか聞こえなかった。

「いや、すみません、話を戻しますが、やっぱり会社ですから、売り上げとか、受注状況とかも数字で出ますし、それも本物じゃないんですか？　数字に基づいて予測して対策して、ちゃんと手を打っていかないとダメじゃないですか」

「ま、それはそうだけど、でも社員同士で集まって騒いでさ、ジタバタすることじゃないよ」

私の中で何か堅いものが強く打つかる音がした。妻鹿さんはバカに落ち着いている。しかし私は落ち着いていられない。いざとなればまた身の振り方を考えなければならない。社歴も浅く、特別目立った実績があるわけじゃない私が人員整理の対象になる可能性は十分にある。そうならない為に、だから私はジタバタして、小西の集まりにも、服部課長の集まりにも、工事課の集まりにだって顔を出した。そもそも登山部にeサンカしたのも前職の「反省」があったからだ。あの昼の居酒屋の、薄暗い店内を今でも夢に見る。寝汗をかいて夜中に目を覚ます。

転職して三年以上。娘も産まれ、引っ越して、ようやく落ち着いて来た。その生活をまた揺るがして家族を不安に陥れるようなことだけはしたくない。

「⑥みんなでヤバいヤバいって言い合ってさ、そういうことよりももっと現実というか、本物の危機と向き合わなきゃ」

「じゃあ妻鹿さんは！　向き合ってるんですか！」言って突っかかりそうになるのを何とか抑えて唇を噛んでいたが、ふと私はある疑念を持った。

――知らないんじゃないのか？　もしかするとこの人は、人員整理の話自体を知らないんじゃないのか。上期の反省という建前で個人面談が行われることは営業会議でも伝えられていた。しかし人員整理。そんなことが公にされることはない。あくまでそれは集まった社員たちの中での話だが、間違いなくそれはある。カップの縁に唇をあてたまま私は考えた。口の中にモカマタリの苦味が染み出してくる。

妻鹿さんはカップを啜り、雫を切って立ち上がった。

「じゃ、いこっか」

妻鹿さんの後について尾根を下って歩く。そこは尾根に沿って土も見え、自然の径になっていて、登山道と錯覚するほど快適に歩けた。

（松永K三蔵『バリ山行』より）

＊注　バラクラバ＝目出し帽のこと。目の周り以外の頭・顔・首をおおう防寒用の帽子。　蒐場＝イノシシやシカなどが泥を浴びる場所。

コッヘル＝登山やキャンプで使われる小型の調理器具。　モカマタリ＝コーヒー豆の種類。　ジップロック＝商品名。プラスチック製の保存袋。

アーヴィン＝主人公が勤める会社の取引先の会社名。

問一　a［　　］～ e［　　］のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――線部①とありますが、このように「私」が感じているのはなぜですか、説明しなさい。

問三　――線部②とありますが、ここでの「私」の心情について説明しなさい。

問四　――線部③とありますが、ここでは「バリ」のどういう点を妻鹿(めが)さんは「おもしろい」と言っているのですか、説明しなさい。

問五　――線部④とありますが、この表現から「私」のどのような気持ちが読み取れますか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　日常の様々なことを忘(わす)れ、登山をすることの良さは理解できたが、現実的には、今日は休みではなく、ましてや会社の様々な問題を直視していないことへの違和感(いわかん)を覚えている。

イ　険しい道をかき分けて進むような登山に対して、最初はその目的がよくわからなかったのだが、自然の中でコーヒーを飲むことで日常にはない満足した時間を味わっている。

ウ　バリ山行とは日常にはない特別な体験をすることができるものと期待していたが、結局は社会の様々なルールから自由なわけではなく裏切られたという思いを抱(いだ)いている。

エ　日常において日々生活しているだけでは現実的な雑務に追われるだけだが、普段(ふだん)では決して味わえない特別な時間を過ごすことができたことへの喜びをしみじみと感じている。

オ　特別な体験を通じて得た感動を妻鹿さんと共有することができたと思っていたが、コーヒーを飲むことで現実に引き戻(もど)されてしまい日常に対する不安を感じている。

問六　――線部⑤とありますが、ここでの「私」の心情について説明しなさい。

問七　――線部⑥とありますが、ここからうかがえる妻鹿さんの考えとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　会社の同僚は、口先だけで行動に移さず悩むばかりで何も解決しようとしていないが、山登りをしている時のようにまずは何も考えず目の前の問題に取り組むべきであり、一つ一つの仕事を着実にこなすことで充実感を得てやりがいにつながっていくという考え。

イ　会社の同僚は、自分のことだけを心配し他人のことに関しては何も考えていないが、会社である限り社員全員で取り組むべきであり、何が原因で業績不振になっているかその問題点に向き合うことによってはじめて解決の糸口を見いだすことができるという考え。

ウ　会社の同僚は、数字や将来に危機感を抱くだけで何も行動しようとしていないが、今後どうなるかがわからない不確定なことに右往左往するのではなく、目の前の命にかかわる問題に目を向けることによってはじめて生きている実感が得られるという考え。

エ　会社の同僚は、会社内のことばかり話題にするだけで顧客を無視しているが、本来は顧客の求めることに合わせた取り組みをしないと業績は改善されないため、会社の中だけで議論するのではなく現場に出て顧客の要求を満足させるべきだという考え。

オ　会社の同僚は、仕事ばかりに自らの人生のすべてをかけ自分の時間を大切にしていないが、社会のルールや日常生活のしがらみにとらわれるのではなく、自分のやりたいことを実現することこそが自分の生きている本来の意味を見いだすことになるという考え。

（このページで、問題は終わりです。）